

視察先別報告 インドネシア

【青年海外協力隊】 環境教育隊員活動視察

概要

南スラウェシ州の州都であるマカッサル市において、配属先の取り組むエコフレンドリーオフィス、地域のごみ分別や再利用促進活動、学校での環境教育に関する活動を行う。

- 1** 井上 佳奈子 ごみ銀行というシステムはおそらく日本人のほとんどが知らないだろう。私も今回の視察で初めて知り、そのシステムの斬新さに驚いた。ごみ銀行にごみを持っていけばお金に換えてもらえるのだが、その場で現金をもらうのではなく、通帳に金額が記帳されていき、一定期間が過ぎれば引き出せる。さらにごみ銀行からお金を借りて、ごみで返済するというシステムまであるというから驚きだ。ごみ銀行についてプレゼンテーションしてくださったNGOのサハルティン氏は、ごみ銀行の効果を社会性、環境保護、経済効果であると述べた。後者2つは理解しやすいが、社会性というのは、ごみ銀行に近所の人々が集まることで生まれるコミュニケーションや会話のことである。ごみ問題が深刻なインドネシアで、ごみ銀行をもっと広めたいと生き生きと語るサハルティン氏の姿が印象に残っている。
- 2** 貴名 貴洋 JICAと民間企業が連携して企業の社員を青年海外協力隊員として開発途上国に派遣する「民間連携ボランティア」という制度があることに驚いた。BOPビジネス（低所得層を対象とする国際的な事業活動）の展開支援を進める企業にとってPR効果が高い制度であろう。青年海外協力隊参加後の再就職などの不安から海外ボランティアに進んで参加できないという若者も多く、この制度が周知されれば、就職時における企業選びの1つの要素として追加することも可能だろう。この制度を利用している所属企業の第1号隊員として派遣された広瀬徹隊員は、マカッサル市におけるゴミ分別・再利用促進などに、市政府やNGOと協議しながら取り組まれている。わずか1年の活動であり、期間の短さを感じているとのことだった。このような制度を多くの企業が活用して、優れた人材を多く開発途上国のために派遣して欲しいと強く願う。
- 3** 國司 まゆ 広瀬隊員は環境教育の活動を行っています。一般企業勤務5年目ながら、1年間隊員として派遣され頑張っておられる方でした。牛が野放しでゴミを食む最終処分場やゴミ銀行などの視察を行いました。まだまだ人口増加中で産業が興隆しているインドネシアでは公害問題、環境汚染、ゴミの処理が懸案事項で、日本の知恵や技術が応援できる分野との印象をもちました。首都のあるジャワ島には、ゴミのリサイクル加工工場（ペットボトルを洗浄・溶かして繊維に変えて製品化する）が多数ありますが、他の島々には工場が少ないため、ゴミの分別数が格段に少ないという広瀬隊員のお話が印象的でした。他の島々では、加工できるゴミの種類が首都のあるジャワ島ほど多くないそうです。ごみ問題は人間が生きていくと永久に発生する課題。まだまだ解決途上の問題ですので、両国の知力を合わせてよりよい道が模索され構築されていくとよいな、と思いました。
- 4** 栗原 朋子 地域社会での環境活動を支援する広瀬隊員は、民間連携ボランティア制度で派遣されている。これは一般企業に在籍しながらの青年海外協力隊活動で、企業のBOPビジネス支援として、またグローバル化対応のためにも、今後この制度を利用した派遣が増えると良いと思う。最終処分場に持ち込まれるごみを減らすために何ができるかアイデアを出し、人や組織をつなぐ役割を担う隊員。こちらの市に焼却施設はないため、ごみは最終的には埋め立てられる。ごみが分別され、コンポストの利用や資源ごみの回収・再利用が進めば、最終処分されるごみは減る。一例としてNGOが進めるごみ銀行では、学校や地域から出る資源ごみを回収し、買い取り金額を通帳に記帳する。3ヶ月毎に現金が引き出せたり、企業スポンサーと提携している場合は歯磨き粉や洗剤などに交換できたりする。家計の助けになるのでうまく機能しているようだ。ごみ銀行でまとまった量を集めた後、業者が買い取る。なお、買い取り価格はジャワ島から離れるほど下がるそうで、地理的な難しさはある。今後もごみは増えると思われるので、学校などで行われているごみの分別活動や環境教育プログラムは継続されるべきだ。

Republic of Indonesia

- 5 佐藤 康仁 南スラウエシ州マカッサル市。青年海外協力隊・環境教育隊員の広瀬徹さんを訪問し、ごみの最終処分場、ごみ銀行、マカッサル市環境局を視察し、インタビューを行った。広瀬さんは民間連携ボランティアとして派遣されている。所属する会社では研修という扱いになっており、JICAでは青年海外協力隊として活動している。このような仕組みは、本人だけでなく、日本の会社、JICA、被援助国のいずれにもメリットが考えられ、なかなかよい仕組みであると感じた。インドネシアはごみ処理の仕組みが発展途上にある。街中のごみであふれかえっており、ごみ最終処分場では、生ごみ、プラスチックごみ、その他のごみが混在している状態で、そのまま埋め立てられている。広瀬さんは精力的にマカッサル市におけるごみ問題に取り組んでいた。広瀬さんは「まだまだやることがたくさんあり、日本の会社に滞在の延長を希望したが、認められなかった」と残念そうに話していたのが印象的であった。
- 6 須磨 麻寿美 「民間連携ボランティア制度」で派遣されている広瀬隊員。彼の希望はゴミポストを小学校に設置することである。小学校にゴミポストを設置することで、子どもに分別習慣が身に付き、家庭でゴミ分別を実践するようになる。それに影響された親がゴミの分別をするようになり、ひいては地域住民にまで広まるのではないかと期待しているという。任務遂行にはNGO、学校、環境局の協力が不可欠であるが、関係者を納得させるのは容易ではないだろう。彼らにとってのメリットが少ないからだ。リサイクル可能なゴミを買い取る「ゴミ銀行」の認知度が高まり運用が定着するまでに時間はかかるだろうが、取組みを継続してほしいと切に願う。
- 7 手塚 大二郎 マスクをしていても、不快さが鼻にこびりつくような臭気に満ちた場所。どこからともなく現れる牛たちが、ゴミの山に登り、その山を食んでいる。ガラス片が散らばる傍で、半袖の子供達が平然と立っている。私が訪れた時の、マカッサルに唯一あるゴミの最終処分場の光景だ。最終処分場まで運ばれたゴミはまだしも、路傍や川にも平然と生ゴミや危険ゴミが積まれている。それが、危険な病気やケガの原因だということを知らず、驚くほど無関心な人が多いのだ。だから、環境教育、つまり人々のゴミへの理解と関心を高めてもらうことが重要なのだ。青年海外協力隊員としてこの地で活動する広瀬さんはじめ、多くの心ある方々が取り組むこの環境教育に今後も注視していきたい。
- 8 宮原 昌宏 訪れたNPOとNGOは現地の人々が運営するゴミ銀行の法人。2つの法人に関わるスタッフは、ゴミ問題を解決することで豊かな社会にしたいという熱い思いを持ったとてもすてきな方々だった。NGO代表のサハルティンさんのプレゼンテーションはとても分かりやすく、ユーモアを交えながら、そして感情が揺さぶられるとても素晴らしいものだった。活動内容は地に足がついており、多くの住民が関わっており、コミュニティの力を使って地域を良くしていく活動は、コミュニティの再生が課題となっている日本にもとても参考になるものだった。マカッサルは私が住む北九州市と、長年にわたって環境問題解決にむけての関係を深めてきた。環境未来都市を標榜する北九州市は、かつて公害などによる環境問題が深刻だった。行政と市民の努力によってとても良い環境を取り戻し、日常の中に当たり前にあるものになっている。そのありがたさを改めて感じる事ができた。これからは北九州とマカッサルの人々とのご縁を繋いでいきたい。